
ハヤテのごとく！～僕はヒナギクさん～

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハヤテの「」とくーー僕はヒナギクさん~

【Zコード】

Z0845F

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

屋敷の前で西沢歩に撥ねられたハヤテは、負け犬公園でジョギングをしていたヒナギクの頭にぶつかり、精神に入れ替わってしまい

⋮

第01話：入れ替わった二人（前書き）

誰でも一度は異性と入れ替わってみたくなる1話。
「僕はこれからヒナギクさんとして生きていきます。b yハヤテ」

第01話：入れ替わった二人

水色の髪に女顔の少年、綾崎颯は、練馬の東側に位置する広大なお屋敷で執事をやつている。

その日の朝、彼は屋敷の主である金髪ツインテールの女の子、三院凪せんいん
ナギにお使いを頼まれた。

「ハヤテ、先日発売したDS版のドラ工5を買つてきてくれ」「解りました。大至急行つてきます」

ハヤテはそう言って、屋敷を後にした。

とは言つても、今は8時丁度。店は10時にならないと開かない。（開店まで2時間はあるな）

ハヤテは腕時計を見て思つと、辺りを散歩しようと考へた。チリンチリン、と後方から自転車のベルの音が聞こえた。それと同時に、女性の叫び声。

「きやああああ　っ！　そこ退いてくれないかな！？」
「ん？」

ハヤテが振り返ると、マウンテンバイクに乗つた少女、西沢歩にしづわ
あゆむが猛スピードで近付いていた。

「ハヤテくん、止めて　っ！」

歩の叫びに応えて、ハヤテはマウンテンバイクを止め……ようとしたが、勢いよく吹つ飛ばされてしまった。

「うわああああああ　っ！」

遙か彼方へ飛ばされたハヤテは、悲鳴を上げながら、負け犬公園のジョギングコースで軽く走っていた桃色長髪の少女、桂雛菊かつら
ヒナギクの頭の上に落ちた。

「うつ！」

呻き声を上げて倒れたヒナギクの上に、ハヤテの体が乗し掛かる。

「痛！」

ヒナギクは引き攣つた表情で頭を押さえながら立ち上がった。

ドサッと鈍い音を立てて落ちるハヤテ。

「ん？」

ヒナギクがそれに気付いて振り返ると、驚いて飛び退いた。
(な、何で僕が倒れてるんだ！？)

まさか死んだのか、そう思つてヒナギクは自分の体を改めた。

「…………！」

そして再び驚くヒナギク。

(二)この長いピンクの髪に赤いジャージはまさか！？
取り敢えず起こすか、そう思ったヒナギクは、目の前に倒れてい
るハヤテの体を揺さぶった。

「う……、うう……」

薄目を開けるハヤテ。

「誰…………？」

ハヤテはそう咳いて目を擦ると、視界の映つた人物の姿に驚いた。
「何で私が一人居るのよ！？」て言つた私の声低くない！？

そのハヤテにヒナギクは冷静になるよう指示する。

「落ち着いて下さい、ヒナギクさん。僕です。ハヤテです」「は？」

訳が解らず、目を点にしたハヤテの懐から、ヒナギクは鏡を取り
出して見せた。

「…………！」

そこに映る自分の姿を見て驚くハヤテ。

「これは夢よ！」

ハヤテは鏡を退かしてヒナギクの頬をビンタした。

「ピシッ！　と、鈍い音が鳴る。

「痛！　何で僕が叩かれなきやいけないんですか！？」

ハヤテはその言葉に、「夢じゃない……」と呟いた。ヒナギクは
それに、「夢でも痛いですけどね」と突っ込んだ。

「それはそうと、僕たち入れ替わっちゃったみたいですよ」

「どうして？」

「たぶん、一人の頭がぶつかった時のショックによるものだと思います」

「どうしてくれんのよー?」

ハヤテは起き上がり、ヒナギクの胸倉を掴んで睨め付けた。

「そんな事言われても、僕にはどうする事も……」

「はあ……」と、溜め息を吐いて、ハヤテはヒナギクの胸倉を放した。

「取り敢えず、暫く様子を見ましょう。その内元に戻ると思つわ」
ハヤテはすっくと立ち上がり去っていく。

「あの、どちらへ?」

「帰るのよ」

「桂家へ、ですか?」

その問いに、ピタッと立ち止まるハヤテ。

「言ひときますけど、今の貴方はヒナギクさんではなく、執事の綾崎 颯です。帰る場所は三千院家ですよ」

「つつきわね! 解つてるわよ!」

「ああ、それともう一つ。帰りにデパートへ寄つて、お嬢様にDS版のドラゴン エストラを買って、あげて下さい。じゃないと僕の執事生命がヤバイ事になりますので」

「貴方の執事生命なんてどうでもいいわ」

「僕がクビになつても宜しいんですか?」

ハヤテはその問いに振り返つて答える。

「仮にそうなつたら私のペツトにしてあげる」

「寝床を貸して頂けるのであれば、それでも構いませんが……」

ヒナギクがそう言いながら納得のいかない顔をすると、ハヤテが疑問符を浮かべた。

「何よ?」

「ペツトという立場が気に入りません」

その言葉にハヤテがヒナギクの股間を蹴り上げた。しかし、彼女は微動だにしない。

「残念でした。そこは男性にしか効果が無いんですよ」

ヒナギクは仕返しにハヤテの股間を思いつ切り蹴り上げた。

「うっ！」

ハヤテは呻き声を上げ、股間を押さえて体を捩^{よじ}つた。

「痛いじゃないのよ！」

ハヤテは目に涙を浮かべながらヒナギクを睨め付けた。

「じゃ僕はこれで」

ヒナギクはそう残して公園を後にした。

第01話・入れ替わった二人（後書き）

この物語は、最終的にヒナギクになってしまったハヤテが東宮康太郎と結ばれてしまう事を目的としています。しかし、当方の一存で大きく路線が変更される可能性があります。その場合は予めご了承下さい。

第02話・ラブレター

正午になつた。

ジャージ姿のヒナギクは、とくにすることもなく、銀杏商店街を彷徨つていた。

グー、と腹の虫が泣く。

(お腹が減つたな。何か食べよう)

腹の減つたヒナギクは、じんぐりといつ喫茶店の前にやつてきた。やはりここか、そう思いながら、店のドアを開けて中に入つた。すると、ハヤテの元クラスメイトである西沢 歩が現れた。

「誰かと思ったらヒナさんじゃないですか」

(えつと、ヒナギクさんは確か……)

「歩、何か食べるものないかしら?」

「何を?」希望ですか?」

「何でもいいわ」

「では炒飯でも作りましょうか」

歩はそう口にすると、厨房へ入つていつた。その間にヒナギクは席に着いて出来上がるのを待つた。

「お待たせしました」

歩が炒飯をスプーンと一緒にテーブルへ置いた。

「ところでヒナさん。先刻、ここにヒナさんを尋ねてきた人が居たんですよ。確か、東富 康太郎という名前だったような……」

「何の用だったの?」

「これを渡して欲しいって」

歩はそう言って、一枚の封筒を取り出した。

受け取ったヒナギクは、それを開封して中から紙を取り出した。

彼女はそれに書かれている恋文に頬を染め上げた。

(何だ、このドキドキ感は?)

「どうかしたんですか?」

その問いにヒナギクは、康太郎からの手紙を歩に読ませた。

頬を赤らめる歩。

「私の胸、ドキドキしちゃったかな。オッケーしちゃった方がいいですよ、ヒナさん」

「で、でも……」

（困ったな。勝手に返事をしたら拙いだろ？）ヒナギクさんに相談してみるか）

ヒナギクは携帯を取り出すと、メール製作画面を起動してハヤテ宛てに送信した。すると、直ぐに返事が来た。

適当にあしらつておいて、そう本文に書いてある。

「歩、私受けないわ。東宮くんの告白は」

「どうして？　ヒナさんが告白にオッケーを出せば、ライバルが一人消えるんだけど」

「…………？」

その言葉に疑問符を浮かべるヒナギク。

「あ、そうだ。ヒナさんにお守りあげる」

歩は恋愛成就のお守りを取り出してヒナギクに渡した。

「恋愛成就？　こんなもの貰つたって何の効果も……」

「それがそうでもないんですよ。このお守りはナギちゃんのお友達から貰つたもので、好きな人に告白したりすると、必ず結ばれるという不思議な力が込められてるんです。私も半信半疑でやってみたら、ハヤテくんと恋人までとは行かなかつたけど、今まで以上に仲良くなれたんです」

（ちょっと待て。僕の記憶では告白されたのは一回だけだし、当時はお嬢様と面識無かつたから、それは有り得ない。といつことは最近、それも僕とヒナギクさんが入れ替わつてから？）

ヒナギクは僅か一秒でその考えに至つた。

「えっと、取り敢えず貰つておくわ」

ヒナギクはそう言つと、恋愛成就のお守りを仕舞い、炒飯を平らげて財布を出した。しかし、中には12円しか入つてなく、食事代

を払う余裕は無かった。

「歩、悪いんだけど立て替えておいてくれる?」

「後で倍にして下さいね」

「冗談きついわよ」

二人はクスクスと笑った。

「じゃ私、もう帰るわね」

ヒナギクはそう言って、喫茶店を後にした。

その頃、三千院家では、ハヤテが部屋のベッド下に隠されている工口本を見付けていた。

(ハヤテくんも男ね)

ハヤテはそう思つと、クスクスと笑いながら工口本に手を伸ばした。

「……………？」

ハヤテは工口本の内容の凄さに驚き頬を赤らめた。

(こんな刺激的なもの見てるのね、ハヤテくんは)

ハヤテはそう思いながら鼻血を垂らした。

(ヤバ！)

ハヤテはチリガミを手に鼻から垂れる血を拭つた。そして、それを詰めて栓をした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0845f/>

ハヤテのごとく！～僕はヒナギクさん～

2010年10月9日19時42分発行